2016. 5. 26

尼崎市立大庄北中学校　第3学年　社会科通信

なんでやねん

発行責任者　巻幡　忠

No.２０

昭和恐慌で、財閥は成長した

世界恐慌の影響を受けて、日本の社会は恐慌におそわれた。昭和時代に入っていたので、これを**昭和恐慌**という(1930年)。

巨大化する銀行

昭和恐慌で、休業した銀行のうちには、立ちなおれず、大銀行といっしょにされたり(合併)、つぶれてしまった(破産)ものが少なくなかった。

そのため、これまで、小さな銀行に預けられていた預金の多くが、恐慌に強かったところに預けられるようになった。それは、三井・三菱・住友・安田・第一・三和の６大銀行と、大蔵省が預かる郵便貯金であった。

昭和恐慌がほぼ終末にきた1934(昭和9)年には、この６大銀行は、全国銀行の総預金高の54．3%を預かっていた。金額では50億8513万円である。世界恐慌の1929(昭和4)年には30%台であったから、急激に大きくなったことがわかる。これに、郵便貯金の35億2900万円を加えると、日本のすべての預金と貯金の合計128億8300万円の66．8%となり、６大銀行と郵便貯金(大蔵省預金部資金)が国民の財産の大半をおさえていたといってよい。

財閥の形ができあがる

財閥は、特別な家族や一族が支配する会社のグループである。三井家と三井財閥、岩崎家と三菱財閥、住友家と住友財閥というような関係がその代表的な例である。

もともと財閥は、ある特別な産業を専門とする子会社を数社もっていただけであった(教科書p. 169)。たとえば、三井財閥は三井鉱山・三井物産、また、三菱財閥は日本郵船・三菱商事、あるいは、住友財閥と住友別子銅山がその例である。

しかし、好景気にわきたった第1次世界大戦の前後から、それぞれの財閥の<u>本社(親会社)が持株会社となり、株式をもつことを通じて、各種の産業にわたる子会社を支配するコンツェルンの形がしだいに形成された</u>。昭和恐慌ののち、それは、ほとんど完成に近づいた。

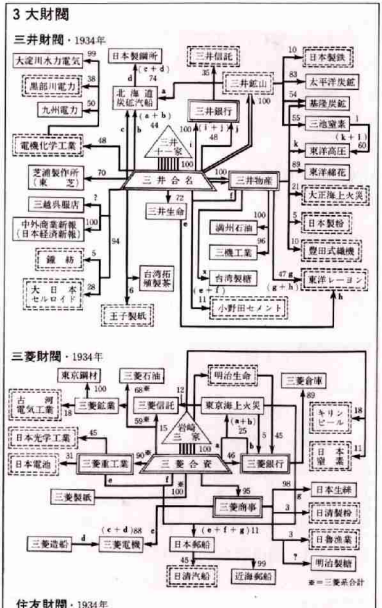
その形を説明しよう。

三井家(11家)・岩崎家(3家)・住友家(1家)は、それぞれの財閥本社(三井合名・三菱合資・住友合資)の株式を100%もち、これを完全におさえる。次に、これらの本社が持株会社になり、保険・船舶・鉄道・鉱山・貿易・倉庫・デパート・製造工業・電力といった、あらゆる分野の会社の株式を買い、これらを子会社にする。重要な会社は50%から90%の株式を支配する。その場合、それぞれの財閥が持つ**銀行の巨大な資金**が、大きな力をふるった。

こうして、コンツェルンの形を整えた財閥は、大は軍艦・飛行機から、小はブタ・ニワトリのえさまで、作らない物はなく、売買しない物はない巨大な会社グループに成長する。

財閥と政党政治

「経済王国」ともいうべき組織を仕上げた財閥は、政府・政党・議会に対して、強大な影響力をもった。三井財閥と政友会、三菱財閥と民政党というように、政党は財閥からの資金援助がないと選挙戦がたたかえず、また、政府は財閥の意志を無視して政治ができないようになっていた。



(資料出所：家永三郎編『日本の歴史6』ほるぷ出版 1984年　p.133～p.135を倉橋が要約した。
なお、図版の順は、財閥の規模順に入れ替えた)